

令和元年度 大垣市障がい者の暮らしを支える協議会 各専門部会開催報告

| 部会名 | 回数 | 開催日 | テーマ | 開催目的 | 参加者 | 実施内容 | 成果・効果 | 課題・今後の取り組み |
|------------|-----|---|--|---|---|--|--|--|
| | | 開催場所 | | | | | | |
| 子ども支援部会 | 第1回 | 令和元年 9月24日(火) 市役所東庁舎 3階 会議室 | 相談支援専門員の質 の向上(障がい児支 援のスキルアップ研 修) | ①子どもの成長発達の捉え方 や、計画の立て方などについ て学ぶ機会をつくる。 ②相談支援事業所が抱える課 題などを意見交換する。 ③相談員の質の向上を図る。 | 相談支援事業所 9事業所(相談員 11名) 部会委員 4名 | ・「子どもの成長発達の捉え方と障害児相 談支援計画の立て方のポイントについて」と 題し、大垣市発達支援専門員 中野たみ子 氏を講師に招き研修会を実施した。 ・「障害児の発達についての理解」や「障害 児利用支援計画」の立て方(短期、長期目 標、モニタリング及び見直しなど)について、 改めて学んだ。 ・普段の計画相談業務の中で困難に感じた ことや質問事項などを事前に把握し、その内 容を交えた講話をした。 ・大垣市指定特定相談支援事業者等集団指 導と兼ねて実施した。 | ・発達支援専門員より子どもの成長発達の捉え方を学び、発達という視 点、子育てという視点を持つこと、アセスメントの重要性を改めて学び、 今後の相談支援に役立てることができるという意見が聞かれた。 ・相談支援専門員の役割は子どもの将来を左右する大事な時期を担 い、また関係機関との連携を実施していく上での中心的存在となることが認識できた。 ・計画に保護者の思いが優先されてしまうという課題には、保護者の思 いを否定するのではなく、まず肯定したうえで、今必要な支援と、今後の 見通しについていくつか考えられる将来像を提示することもひとつであ るなどアドバイスを得た。 ・それぞれの事業所が抱える課題解決に向け、今後の支援に役立てる ことができるとともに、相談支援事業所間で課題を共通理解することが できた。 | ・相談支援部会と共同企画するなど、 相談支援事業所研修を継続的に実施 していく。 ・相談支援専門員だけでなく、児童通 所事業所、学校等と含めて研修会を実 施していく。 |
| | 第2回 | 令和元年 11月26日(火) 市役所 2階 第1会議室 | 家庭・教育・福祉 の連携による切れ目 のない支援について | ・スマイルブックの現在の取り 組みや課題を関係機関で共有 し、今後のスマイルブックの有 効な活用につなげていく。 | 医療機関:いかわクリニック 教育機関:西濃教育事務所 市学校教育課 相談機関:西濃圏域発達障がい 支援センター、西濃障がい 者就業・生活支援センター 行政機関:子育て支援課 部会委員 6名 | ・スマイルブックをツールとし、切れ目のない 支援につながるよう「スマイルブックの有効 な活用について」「高校年齢シートを活用し た中学卒業後の支援について」「福祉と教育 との連携について」の3つの議題について医 療、子育て、療育、教育、福祉の支援者で協 議を実施した。 ・事前に各関係機関から現在の取り組みに ついてのご意見、利用状況についての保護 者アンケート結果も情報共有し、より有効な 活用について協議を行った。 | ・幼児期から中学卒業後に向けて、スマイルブックのより有効な活用に ついて関係機関からご意見をいただいた。 ・スマイルブックを本人に合った活用の仕方ができるよう、ホームページ から必要な部分を選んで使えるような形にしたり、発行時に今後の利用 について意識づけができるよう発行するタイミングや場所など発行時の 体制を整えることが必要などの意見があった。 ・スマイルブックの重要性に対する支援者の理解は療育機関や保育 園、小・中学校までは浸透しているが、高校現場では特別支援教育担 当以外の一般職員にはまだまだスマイルブックの理解が広がっててい ない現状を現場の意見から把握できた。 | 保護者、支援者ともにより有効な活用 ができるよう、発行時の他機関との連 携等については、次年度取り組んでい く。 |
| 暮らし・相談支援部会 | 第1回 | 令和元年 7月29日(月) 市役所東庁舎 3階 大会議室 | 地域生活支援拠点等 整備にむけて 「緊急対応が必要と なった事例を検討し、 課題について考える」 | 緊急対応が困難となるケース の課題を洗い出し、その要因 (施設の利用がないなど)を明ら かにする。 | 障害福祉サービス事業所 6事業所 相談支援事業所 7事業所 部会委員 8名 |  ・障がい者の地域生活支援拠点等につい ての検討を進めるために、これまでの経緯と今 後の進め方についての説明した。 ・緊急の対応が必要になった事例(各事業所 からの情報提供事例)の紹介した。 ・①「緊急の定義について」、②「緊急対応が 困難となる要因について」をテーマにした個 人ワーク、グループワークを実施した。 | ①「緊急」の定義について ・拠点としての「緊急」を定義して欲しい、いつまでが「緊急」と考えるの か、緊急とは家族が入院・死亡するなどの変化によるもの、災害時、虐 待、ライフラインを確保できない時、命に係わる時、行政が認めた時な どの意見が出た。 ②「緊急対応が困難となる要因」について ○本人の要因 ・福祉サービスを利用したことがなく疾病やADLなど本人の情報がない、 本人が緊急事態を理解・認識ができず同意が得られない、本人が SOSを出せない、相談先を知らない、経済状況が不明などの意見が出 た。 ○家族などの要因 ・家族がいない、地域とのかかわりが無い、家族が緊急性を理解してい ない、家族の同意が得られない、本人以外で契約や管理をする人がい ない、などの意見が出た。 ○施設など受け入れ側の要因 ・短期入所先の空き部屋がない、受け入れ施設が少なく対応できない、 人員不足で受け入れ体制が整わない、三障害対応としている施設で も慣れていない障害の方の場合は受け入れが難しい、受け入れ施設側 がリスクを負うことになる、移動手段がないなどの意見が出た。 | ①次回に緊急時の定義について承認 を得る ②緊急受け入れをしやすくするために 必要なことを考える。 |

| 部会名 | 回数 | 開催日 | テーマ | 開催目的 | 参加者 | 実施内容 | 成果・効果 | 課題・今後の取り組み |
|------------|-----|--|--|---|--|--|---|---|
| | | 開催場所 | | | | | | |
| 暮らし・相談支援部会 | 第2回 | 令和元年 10月29日(火) 市役所本庁舎 1-4.5会議室 | 地域生活支援拠点等の整備に向けて 「受け入れをしやすくするために必要なことを考えよう」 | 地域生活支援拠点等の整備に向けて受け入れをしやすくするために優先的に取り組むこと、受け入れをしやすくするために必要なことを考える。 | 障害福祉サービス事業所 6事業所 相談支援事業所 7事業所 部会委員 7名 | ○説明事項 ・緊急時の定義の確認 ・地域生活支援拠点等整備に向けてのアンケートの結果報告 ・地域生活支援拠点の整備に向けて、優先的に取り組むべき課題 ○グループワーク4項目 ①緊急時の連絡体制確保 ②グループホーム・短期入所の体験利用の推進 ③緊急時の対応が必要と思われる対象者リスト作成 ④緊急時、受け入れ施設への移送手段について検討 | ①緊急時の連絡体制確保 ・24時間対応は当番制より専門種別ごとに対応したほうがよいのではないか。 ②グループホーム・短期入所の体験利用 ・体験利用の受け入れ先が少なく体験利用で今利用している人が使えなくなると問題、今まで使っていない人が体験利用を使いたいという考えを持ってもらう必要がある、介護保険施設では日中一時では身体障害以外の人を受け入れができないのでは。 ③緊急時の対応が必要と思われる対象者リスト作成 ・サービスを使っていない人の生活の把握が難しい、個人情報の取り扱いをどのようにしていくのか取り決めが必要 ④緊急時、受け入れ施設への移送手段 ・タクシーにお願いできないか。 | 次回、地域生活拠点等の整備の検討に向けて、具体的な方法を検討する |
| | 第3回 | 令和2年 1月24日(金) 市役所 会議室4-4 | 「地域生活支援拠点等の整備に向けて具体的に考えよう」 | 地域生活支援拠点等の整備に向けて、具体的に考える。 | 障害福祉サービス事業所 5事業所 相談支援事業所 8事業所 部会委員 5名 | ○提示 地域生活支援拠点等の整備方針イメージ図(案)、緊急時支援登録者(ハイリスク者)のリストアップ対象要件(案)、緊急時支援フロー図(案)について ○グループワーク 【課題①】拠点利用者の登録様式について、どんな情報があれば受け入れしてもらいやすいかについて具体的に考える。 ・事前登録シートについて、具体的に考える。 ・サービス利用者(計画相談が付いている人)の基本情報にプラスするといった情報について考える。 【課題②】空床確保、輪番制での対応以外で緊急受け入れをする方法を考える 【課題③】緊急時支援フロー図(案)について検討する。 【課題④】移送手段について具体的に考える。 【課題⑤】提示した対象者のリストアップ条件について検討する。 | 【課題①】登録様式について ・計画相談のある人も登録のための様式を提出する必要がある。 ・情報提供の同意が必要であるのではないか。 【課題②】空室確保、輪番での対応以外で受け入れをする方法について ・事業所には人員不足等から職員配置できず、利用していない部屋がある。その事業所に本人をよく知る事業所職員等を派遣する仕組みを設ける。手当が必要。 ・事業所同士の情報交換の場を設け連携しやすい体制づくりをする。 【課題③】緊急時支援フロー図(案)について ・相談支援事業所が連絡・調整しても難しいことが多いため、市の支援が欲しい。 【課題④】移動手段について ・福祉有償運送の活用 【課題⑤】対象者のリストアップの条件について ・「重度」という表記に躊躇されるのでは。 ・「区分4以上相当」ではなく、もう少し具体的な例を記載してはどうか。 | 地域生活支援拠点等のより具体的な運用、体制の整備についての検討 ・ハイリスク者のリストアップ、他部署管情報の集約 ・「緊急時支援登録シート」の作成、一元管理 ・緊急時対応のコーディネイト、相談、連絡体制の確保 ・緊急時の受け入れ先の確保(利用協定の締結、事業所登録) ・支援員派遣、移動手段の仕組みづくりの検討 ・施設空き状況の情報共有システムづくり ・地域生活支援拠点等の事業所登録の仕組みづくり ・事業所紹介、制度説明、登録推奨用パンフレット作成 等 |
| 就労支援部会 | 第1回 | 令和元年 8月2日(金) 大垣市情報工房 スインクホール セミナー室 | 「働きたい！その気持ち応援します」 福祉就労まるっと相談フェア | ①就労支援事業所について周知・情報提供 ②ハローワークや就労支援センターの活用のすすめ | 一般参加者:73名 就労支援事業所:14事業所 相談機関:大垣市障がい者就労支援センター、ハローワーク大垣 部会委員 2名 | ・大垣市内の就労支援事業所(就労移行支援事業所、就労継続支援A型、B型事業所)の職員による事業所概要説明を全体で実施した。 ・その後、各事業所ごとのブースにおいて、個別に相談会を実施した。 | ・事業所紹介フェアとしては4回目となるが、昨年度よりも参加者数が増加した。特別支援学校の高等部の生徒や保護者のみではなく、特別支援学校の初等部、中等部の生徒や保護者の参加があり、早い時期から将来を見据えて就労を考える機会となった。また、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方の参加があり、福祉就労への関心が見受けられた。 ・「福祉就労までのプロセスと事業所紹介シート」を参考資料として配布し、参加者に理解を得やすかった。 ・今回は個別相談を重点とした。そのため、参加者から「現場の人の話が聞けてよかった」「全体の事業所紹介ではわからない内容が直接聞けてよかった」との意見があり、個別支援ができた。 | ・事業所にとっても、実習や見学以外で当事者と関わるきっかけとなっている。また、会場内での説明の仕方や対象者についても再度検討する必要性も感じられた。 ・就労移行支援、就労継続支援A型と就労継続支援B型の事業所とを分けた実施の仕方の検討する。 |

| 部会名 | 回数 | 開催日 | テーマ | 開催目的 | 参加者 | 実施内容 | 成果・効果 | 課題・今後の取り組み |
|--------|-----|--|---|--|---|--|---|---|
| | | 開催場所 | | | | | | |
| 就労支援部会 | 第2回 | 令和元年 11月12日(火) 市役所東庁舎 3階 会議室 | 障がい者の就労支援 を考える ～「生活を支える」視 点から～ | 就労支援の場において、精神 疾患のある方の支援方法につ いて困難さを感じているとい う課題がある。精神疾患のある 方の相談・支援の在り方を学 ぶ場を設け、各事業所の支援 の質の向上を図る。 | 相談支援事業所 9事業所 就労支援事業所 15事業所 就労相談支援事業所 3事業所 部会委員 2名 | ・『あなたの「就労支援」でクライアントを幸せ に・・・』と題して、各務原市相談支援事業所 あめあがり 相談員 太田 康隆 氏による講 話を実施した。 ・その後、事例検討として、事例の5年後の 幸せのためにどうしていったらいいかをグ ループワークにて行った。 ・次の視点の支援者としての考え方を学ん だ。 ①総合的な援助の方針、長・短期目標、支 援目標の設定は、本人の意思や思い、なり たい姿を反映したものになっているか ②自己実現に向けてのステップアップ(生活 の満足度、充実感)をしているか ③サービス等利用支援計画と個別支援計画 は、事業所間で連携して作成し、共有してい るか ④精神障害者への対応・配慮の工夫はなさ れているか ⑤利用者同士のトラブル、施設外でのトラブ ルへの対応は、適切になされているか。 | 市外の事業所を運営されている講師を招くことで、他市での就労支援 やアセスメントの仕方について学べた。 また、支援の中で変えていくべきこと、視点を変えることの大切さなど に気づくことができた。 ○参加者から次の感想を得られた。 ・熱量の高い講演で、あつという間だった。「当事者目線」に立ち帰り、実 践に活かしたい。 ・もう少し詳しくお聴きしたいと思った。支援者としてのあり方を見直すよ い機会となった。 ・障がい者支援の現場における基本を深く見つめなおすことができた。 日々の支援の中で忘れてしまいがちになることをもう一度思い出し、い く必要があると感じた。 | ①事業者同士で話し合いができる場を 設ける。 ②事例を提供してもらいグループワ ークで解決方法の案を検討する。 ③支援の在り方を考え直すきっかけ づくりの場を設ける ④利用者と事業所が適切にマッチン グする場の提供の在り方について検討す る。 |
| | | 令和元年9月3日(火) 大垣市総合福祉会館 4階 第1・2研修室 | アンガーマネジメント で障害者虐待防止を | 障害者福祉施設等職員がアン ガーマネジメントを学び、虐待 の未然防止やよりよい支援に つなげる。 | 参加者42名 障害福祉サービス事業所 12事業所 障害児通所事業所 6事業所 相談支援事業所 4事業所 部会委員 2名 | ・大垣市障害者虐待防止センターにおける 通報件数等(平成30年度 通報5件、認定1 件)を報告した。 ・社会福祉法人成春館 田原授産所施設長 である鎌田博幸氏より、「イライラを解消して 虐待防止に役立つアンガーマネジメント」を テーマに講義を実施した。 ・怒りは喜怒哀楽の中で一番パワーを持って おり、うまくコントロールできないと人間関係 を壊したり、犯罪に繋がることもあるので、ア ンガーマネジメントの必要性は今後大きく なっていくことを伝えた。 ・講義の中で、グループに分かれて怒りに関 する体験や、その怒りに対する自己診断等 について意見交換を行った。 | ・障害者施設等職員が出席しやすいよう研修会の開催時間を18時30 分からとした。そのため、事業所の支援員が受講でき、アンガーマネ ジメントを障害者虐待防止に役立てていただくよう伝えることができ た。 ・障害者は、その障害特性により思わぬ行動に出ることがあり、そのよ うなときに声を荒げて怒る、無理に行動を制限してしまうことが虐待に繋 がってしまうこともあるため、講義においては、怒りをコントロールするこ とで、他人や自分を傷つけず、モノを壊さず上手に怒っていることが表 現できる方法について学んだ。 ・参加者から今日学んだことを職場で広めたい、普段何気なく支援して いることを見直せた、怒りの境界線を知ることで、今後の自分を成長さ せることができると感じたなどの感想が得られた。 | ・障害者福祉施設等のほか、地域にお ける障害者虐待の早期発見、未然防 止のための支援ネットワークの構築が 必要。 ・障害者福祉施設等職員のみではな く、民生児童委員等の地域の方に向け て障害者虐待防止に向けての啓発を 実施していく。 |
| 権利擁護部会 | 第2回 | 令和2年 2月4日(火) 市役所 8階 大会議室 | 知ろう！役立てよう！ 成年後見制度！ | 成年後見制度利用促進に向 け、地域連携ネットワークの一 員となる福祉関係者や地域の 民生児童委員に制度の理解と 周知を図る。 | 参加者 166名 障害者団体・親の会会員 18名 障害福祉サービス事業所 13事業所 障害児通所事業所 4事業所 相談支援事業所 4事業所 部会委員 2名 民生児童委員・地域包括支援 センター、介護サービス事業 所、医療機関、一般市民 等 | ・大垣市における成年後見制度の現状と利 用促進について、大垣市高齢介護課職員より説明した。 ・西濃地域成年後見支援センターについて、 大垣市社会福祉協議会職員より説明した。 ・「成年後見制度の概要、法定後見等の申 立・職務の実務について」と題して、公益財 団法人後見支援センターリーガルサポート 岐阜県支部長 栗山昌治氏の講演を実施し た。 ・「事例をとおして成年後見制度について知 ろう」と題して、ぎふ権利擁護センター代表理 事 岡川毅志氏の講演を実施した。 ・高齢部門、障害部門、地域福祉部門と合同 開催した。 | ・大垣市の成年後見制度利用者の現状を伝え、利用促進を進めてい くことが必要であることを周知した。そのためには、利用者がメリットを実 感できる制度にしていかなければならないこと、地域連携ネットワークづ くりが課題であることを伝えられた。 ・西濃地域成年後見支援センターの業務や相談内容について説明し、 気軽に相談できる場所があるということを周知できた。 ・成年後見制度の現状と課題について、最近では、市長申し立ての件数が 増えてきていることを伝えた。法定後見制度のほかに、本人が後見人を 決めておく任意後見制度があることなど知識を習得した。 ・成年後見制度を必要とする事例を通して、本人の意思を尊重すること が大切であること、しかし正解があるわけではない。関係者や地域の協 力が不可欠であるという説明があり、参加者に地域連携ネットワークの 一員であることの意識づけをすることができた。 | ・成年後見制度利用が必要な人を早期 発見し、支援につなげていくことが大 切。必要なときに必要な人につなげる 仕組みづくりをしていく。 ・地域の人や関係者が連携してスム ーズに支援につなげられるような地域連 携ネットワークづくりを進める。 ・制度理解と周知、啓発を継続的に実 施する。 ・今後、高齢介護課、社会福祉協議会 と連携し、成年後見制度利用促進計画 の策定に向けて協議していく。 |
| | |  | | | | | | |